

Hiroshi Kato and Erina Iwasaki,

Rashda: The Birth and Growth of an Egyptian Oasis Village.

Leiden: Brill, 2016, xxvi + 294pp.

おか ど ま さき
岡 戸 真 幸

はじめに

エジプトはナイル川沿いに緑地が集中した国土を持つ。この地域は、地中海にそそぐ下流の北部デルタ地帯の下エジプトと、首都カイロを中心とした都市部、カイロ以南からスーダン国境までの上エジプトと大まかに3つに区分される。それに対し、ナイル川から離れたオアシスなどの砂漠地は周辺として位置づけられてきた。この区分はエジプトをめぐる研究動向にも如実に現れ、オアシスなど砂漠地の現在を扱う研究は少ない一方で、ナイル川沿いの諸都市や農村は、多くの研究の対象とされてきた。ナイル川沿い諸都市の中でも、カイロとその周辺を含む都市部に関する研究は特に、質、量ともに厚みがある。ただし、研究対象がカイロに集中している現状は、近年、上エジプトの歴史からエジプトを捉え直す試み [Abul-Magd 2013] や、首都以外の近隣都市を調査地とする研究も増えるなど、変化の兆しが見られるようになった。本書も、ナイル川から離れ、地下水源を利用するオアシスを、地理的に周辺とすることなく、エジプト各地での世帯調査による共通の基準を用いて他の地域と比較し、オアシスの現在からエジプト社会を見つめ直す試みである。

本書はまた、著者らを中心に、2003年から開始されたエジプト中央動員統計局 (CAPMAS) との合同調査として、エジプト各地の村での世帯調査や、その村からカイロへの移住者を対象に行ってきた調査の成果のひとつである。一連の研究成果では、GISによる詳細な地図を用いて、住民の親族関係の分布

状況や、年代ごとの移住分布などの情報が整理されたり、世帯調査による家族構成や年齢、収入などの統計が提示されたりと、その地域を包括的に理解するうえで有益な情報が提供されている。エジプト研究では、対象地区の通りや住居の区分の詳細を示したうえで、住民構成などの情報を添付した地図を提示できる事例はまだ少ない。本書は、エジプトでこうした情報を管理している CAPMAS との合同調査により、多くの地図や統計情報の提供を可能にした。また、合同調査の利点は、対象地域の選定においても、豊富な統計資料の利用による事前調査を現地専門家と共に行える点にある。これは、本書の強みと言ってよい。

I 本書の構成

本書は、カイロから南西に750キロメートルのダフラオアシスにあるラシュダ村を対象にしている。構成は、序章に続き、4部構成の全14章と、結論から成る。序章では、研究視角として、ナイル川に依存し、首都であるカイロを中心とした中央集権的な社会とされてきたエジプトにおいて、中央と地方という二項対立的な関係の見直しとして、ナイル川ではなく地下水源に頼り、異なる発展をしてきたオアシスを取り上げる意義が述べられている。ナイル川を基準に、エジプトを階層的な支配と依存の関係にある均質的な地域区分によって捉える見方は、異なる水資源によって育まれてきたオアシス社会の研究から、検討し直されねばならないとされる。

第1部「ダフラオアシス」(Dakhla Oasis) では、4章にわたり、オアシス地域概観、環境と資源、家族構造、社会経済構造について述べられている。降水量が少なく、地下水に頼った社会として、人々は、数十年単位で井戸の側で暮らし、これが枯れると新しい水源を求めて移動する生活を送っているとされる。本書では、世帯 (household) を居住と家計を共にする基本的な単位として分析対象とし、家族 (family) を具体的な生活を越えた社会的関係として、また諸個人/世帯によって動員される社会的資源にもなるものとして捉える。ラシュダ村は、後者に相当する大家族であるアーイラの規模が小さく、含まれる世帯数が少ないという特徴があるとされる。この家族構造が、ラシュダ村での人間関係を考察す

る基盤になっている。

著者らは、ラシュダ村を含めたエジプト各地の19村で調査を行い、収入・雇用・教育水準に数値を絞り、各調査村をクラスター分析により、同じ傾向ごとに分類した。その結果、同村は、カイロからもナイル川沿いの諸都市からも遠いオアシスにあるにもかかわらず、政府への依存度や教育水準の高さで、下エジプトの諸村との近似性があると指摘された。水資源を得るための井戸を政府の掘削に頼る場合も多く、さらに、政府部門で働く者が多く存在するなど、政府との関係は、中央から遠く離れているが、密接に存在している。一方で、ナイル川沿いにありながらも、識字率が低く、政府部門で働く者が少ないという特徴が上エジプトにはあるが、収入面では出稼ぎ者の送金などで19村の中では上位にあり、最も貧しい地域という広く知られた印象とは異なる結果が提示される。また、中部エジプトが最も貧しい地域になるという指摘は、ナイル川を中心に考えられてきた今までの地域区分の見直しにつながるだろう。

第2部「歴史の中のラシュダ」(Rashda in History)では、3章にわたり、ラシュダ村の形成、発展、水を基盤とした社会について述べている。著者らは、村に現存する19世紀の行政文書や、証文・訴訟関係の法律文書を活用し、当時の村の人々の生活や関心ごと、周辺各村の住民との関わり方や交流範囲を浮かび上がらせ、村の経年での変化を示した。同村は、隣村からの移住者により19世紀初頭に開かれ、発展してきた。現在、ほぼ全ての世帯主は、村生まれである。村が当初作られた場所は、旧居住区とされ、現在大半の住民は、1960年代以降に建てられた新居住区に移り住んでいる。同村は、他のダフラオアシスの村に比べると水量は比較的豊富であるが、耕作するのに十分な水量はなく、水の供給が不安定であると述べられている。村では、水の分配についての地域内での原則を作り、また水問題への政府の介入を求めてきた。

第3部「今日のラシュダ」(Rashda Today)では、現在のラシュダ村の様子が4章にわたり、共同体、村の家族構造、灌漑設備、農業と世帯経済に分かれて描かれる。同村は、独立した行政村として、2つの衛星村を持ち、近隣の都市とのマイクロバスによる交通手段が存在する。人口は、2014年時点で衛星

村を含めて6862人になる。オアシス地域の農業は、井戸の位置や水量によって、農法から農民同士の社会関係まで規定されている。井戸は、現在は機械によって掘られたものが大半だが、村民が出資するか政府が出資するかで運用の仕方に違いがある。前者の場合、出資者や労力を提供した者に、掘削の貢献度に応じて井戸水の使用権が時間を決めて割り当てられる。後者は、政府によって、時間ではなく季節や作物の種類に応じて水量が割り当てられ、灌漑地区それぞれに供給される。後者での作物は農業組合を通して、政府によって決められている。

家族構造について、1861年に起こった放火事件の際に記録された住民台帳と、2005年に著者らが行った調査が比較された。現代では19世紀に比べると、既婚の兄弟同士の同居の事例が見られないという。ラシュダ村では、現在は兼業農家が多いため、同居による労働力の確保が重視されない結果だと考えられる。さらに、人口が増えるにつれ、大半の住民が新たな土地を開拓し移り住むようになるが、アーイラごとに色分けされた1960年代以降の新居住区の分布図(Map 20, p.174)からは、数世帯がまとまる程度で、地区全体に同じアーイラ成員が分散して居住しているように見える。分散居住の実態は、村民の生活におけるアーイラの位置づけを考察するうえで貴重な情報となる。様々な資料の組み合わせにより、村の誕生から現在までの発展が明示されている点は、示唆に富んでいる。

第4部「3号井戸灌漑地区における共同体」(Community in Well No.3 Irrigation District)では、3章にわたり、特定の井戸に結びつけられた農地によって構成される灌漑地区の概観が、村民出資の井戸の掘削事例によって説明され、その後、政府が1959年に最初に掘削した3号井戸を利用した灌漑地区で形成された協業のあり方が描かれる。村民出資による井戸の場合、出資者同士が家族・親族や友人知人関係で構成されるため、水利用に関するお互いの取り決めは、柔軟に融通をきかせて行われる。農作業は出資者の家族や、周辺村から集められた賃金労働者が行い、出資者本人は、本業を別に持つ場合もある。協業の基盤は、アーイラを中心とした男性成員の労働力によって成り立つ。彼らは、お互いが必要な時に無償で労働力を提供し合う、ムシャラカと呼ばれる協業慣行によって連携しながら農業

を営んでいる。

これに対して、3号井戸は政府が砂漠地の開拓を推し進める新河谷計画（New Valley Project）の一環として掘られた。その井戸による灌漑地区は、村の北西に位置し、いくつかの基準を満たした34人に分け与えられた。所有者の3割ほどは、村外在住者によって占められている。彼らは、労働力となる多くの世帯構成員を持ち、土地なし農民であるなどの理由によって政府に選ばれており、アーイラを基盤とする社会関係で互いに結ばれているわけではない。彼らは、地区の3つの区画に土地を持ち、隣り合った農地の所有者と、水の使用方法や、管理、協業の仕方、お互いに今まで関係がなかったにもかかわらず、伝統的なムシャーラカによる考え方を踏襲した農業を行っている。村外からの流入者が少ない村において、従来のアーイラの枠組みとは異なる関係が、政府主導により形成された点は興味深い。

結論では、序章から述べられてきた、1. 水供給が不安定であること、2. 政治体制への依存、3. 個人々が限られた環境の下で、お互いが労働力を提供し合うなどの合理的振る舞いをする、この3点がラシュダ村の特徴であった点が確認された。本書は、全体を通して、この3点を基準にラシュダ村を論証し、第3部以降で水資源の乏しい土地で持続的な社会を形成する具体的な事例として、政府出資の井戸による灌漑農地を扱った。農業は、その3点に関わるため、水利用の事例として記述の中心になった。この点を次節で検討し、本書のさらなる評価を行っていきたい。

II 第3部以降の展開に焦点を当てて

本書の論点で重要と思われるのは、現在のラシュダ村に焦点を当てた第3部以降での水資源と人間との関わり方の分析である。農地は地下水を汲む井戸に隣接して開かれるが、水資源をいかに耕作者間で分配していくかが、現地住民の主要な関心事となっている。本書は、農業での水をめぐる協業を人間関係の中心として記述している。

本書によると、ラシュダ村は、当初は村民同士の互酬的な関係に基づき、井戸の掘削から管理まで行ってきた。1902年に政府の測量調査が入り、1910年に掘削が許可制になって以降、政府の土地開拓事

業による、より大規模な井戸の掘削が行われるようになった。政府は、井戸を掘削し、灌漑農地を住民に割り当てることで、地域の水資源と住民を管理する意図を持っていたように見える。ところが、1995年には、法改正により、個人資産での井戸の掘削が可能になり、村民同士が出資し多くの投資井戸が掘られるようになった。本書では、水資源の管理をめぐって、政府と村民、そして村民間でどのような関係が築かれてきたのかを井戸と協業のあり方からまとめている。

まず、村民出資の井戸において、アーイラ内の数世帯は、隣接した農地を持ち、水の分配で互いに融通し合うなどの協力関係にある。アーイラは、村民の社会関係の基盤として、協業を支えるとともに、村内の紛争解決などの役割を担う場合もある。アーイラは拡大家族を指すが、本書では具体的な血縁関係は示されず、帰属として人々を結びつける点に注目している。村民出資の井戸では、アーイラ成員が中心になって掘削し、その貢献度に応じて水を分配し、農作業も同じ者たちが一貫して行っている。

それに対し、政府出資の井戸では、掘削や水分配を政府が管理するため、灌漑農地使用者が労働の交換などの協業を行う機会は農作業に限定される。ただし、村外の者も含めた幅広い協業関係が見られる点で、従来と異なる集団形成原理の可能性を示している。土地使用者は、播種や収穫時に多くの労働が必要な場合、自身のアーイラも含めた親族だけでなく隣接する土地使用者など様々な関係の者に協力を依頼する。金銭を払う場合もあるが、ムシャーラカとして互酬的な労働のやりとりも行う。政府の介入により、住民間が協力する余地は減り、水や農作物の面では政府に管理されているが、農地の耕作に関しては住民の裁量部分があり、政府と村民は、中央によって一方的に統制される関係にはないことが、本書から理解できる。

しかし、本書では、ラシュダ村の社会を、農業における水利用を中心に整理する一方で、飲料水や洗濯などの生活用水をいかに利用しているかの記述が少なかった。村民が日常的に水とどのように関わっているかは、生活上での水の使い方からも観察できただろう。村人たちは、農業用水に関して、大半の井戸が50年ほどで枯れることを水資源が枯渇する危機とは捉えずに、新しい井戸の掘削に向かうとき

れる。水資源への信頼ともいえるこの態度はラシュダ村を含めたオアシス住民の気質を物語っていると思われるが、日常生活における水への接し方も注目に値する。村民の暮らしの面から先述のラシュダ村の3点の特徴(1. 水供給の不安定性、2. 政治体制への依存、3. 合理的振る舞い)を検討すると、どのような結果が出るのだろうか。また、農業用水の分配においても、水の使用量は、個人的な利害がからむはずであり、争いの種になる可能性もある。いかに争いを回避し、使用者間で合意に至るかは、生活用水の利用も含めて今後の検討課題にできるだろう。

第3部にある世帯収入の表(Table 39, p.206)を見ると、政府部門などで得る収入が、農業よりも多く、いくつかの収入を組み合わせていることがわかる。他地域や海外への出稼ぎ者が少ないため、送金を受ける者は多くない。さらに、農産物についての自家消費及び換金の割合の表(Table 43, p.216)を見ると、小麦や飼料などを作る世帯は、5割から7割を自家消費に充てており、その半分以下の世帯が換金作物の米やナツメヤシを作っているが、4割近くが自家消費されている。水資源に制限があるため、家族の中で主に女性が農業に関わる比率が高く、男性は非農業部門で働く者が多いとされる。農業は、水資源と人間の関わりで本書の記述の中心となっているが、彼らの家計を支えてはいないように見える。村民の生活基盤は政府の介入によって保たれているとしても、オアシスの生活は、経済的に厳しいだけでなく、土壌の塩類化にも脅かされるなど恵まれた環境にはない現状が本書から読み取れるのである。

また、オアシスには、新河谷計画により主に1960年代から多くの学卒者が砂漠地の土地を与えられ、都市から移住した村が点在しているが、ラシュダ村は、村民の大半が近隣村出身で村生まれであるとされるため、その対象ではないようである。ナイル川沿いの諸都市からの移住の事例がほとんど存在しないのは同村の特徴である。

ラシュダ村から200キロメートルほどに位置するアブー・ミンカル村は、同じく19世紀に村が開かれたが、その衛星村に1990年代にムバラク大統領の雇用創出計画の一環として、多くの学卒者が土地を

与えられて移住した経緯を持つ。人類学者ジョゼフ・ヴィスコミによる調査では、開発の負の側面として、同村での計画が想定通りには進まず、政府による支援が行き届いていない現状が取り上げられている[Viscomi 2010]。村民は、その現状に不満を持ちつつ、自らで解決すべく様々な試みを行っている。

これに対して、本書では、数世代にわたり続けられてきた村民の協業慣行を基盤にして、政府からの雇用と政府出資による井戸での灌漑農地を有効に使う様子が描かれ、村民の不満が見られない。両者の違いは、何に起因するのだろうか。著者らが調査を行ったラシュダ村以外の18村の中には、ラシュダ村と傾向の異なるオアシスの学卒者の村も存在する。著者らによる砂漠地でのさらなる研究が期待される。

ラシュダ村の人間関係は、村民出資と政府出資に大別できる井戸の灌漑農地で見られるように、単にアーイラを中心としているわけではなく、むしろ水を中心に柔軟に構築されていると考えられる。ラシュダ村の灌漑農地を所有する近隣村の者や、ラシュダ村の者たちが6キロメートルも村から離れた隣村に近い場所に投資井戸を掘るなど、村の行政単位を超えた周辺へと広がる水を求める動きには、オアシス特有の生活が見られる。本書は、様々なデータに基づき、オアシスを俯瞰視するだけでなく、ナイル川沿いとは異なる厳しい環境で作られる社会のあり方を、水資源を軸にして周辺から新たに提示しているのである。

文献リスト

- Abul-Magd, Zeinab 2013. *Imagined Empires: A History of Revolt in Egypt*. Berkeley: University of California.
- Viscomi, Joseph 2010. *The Farthest Place: Social Boundaries in an Egyptian Desert Community*. Cairo: The American University in Cairo Press.

(人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター／上智大学イスラーム研究センター・研究員)